

意見集約シート

意見集約シート

「青字」は前回から追加又は修正した内容

検討（議論） のテーマ	小項目テーマ	テーマに関する意見 （第1回での発言要旨）	テーマに関する意見 （第2回での発言要旨）
テーマ① 「文化」か「観 光」か	「文化観光」の考え方	地域に歴史がありそれを語る語り部がいて、その（フィロソフィーとヒストリー）の上に成り立っていくのが観光である	地域の人々は観光客に地域の文化や祭りの一番いいところを見せようとサービスをし過ぎて、疲れてしまう。一番良いところは地域の人が十分楽しみ、観光客には少しだけお裾分けをするという考え方であれば、持続的に楽しく続けられる。
		「人・まち・歴史」があって、その上に文化があり、さらにその上に観光が成り立っている。地域の方々のやる気と歴史を疎かにした観光は絶対に続かない	
		文化か観光かではなく、一緒にやっていかなければこの町の将来は無い	

テーマ② （無形民俗文化財 （行事）としての）維持・継承	だんじり行事に関するまつり町と郡部の関係性	昔は財力もあったので、だんじりは自分の町のものだと思っている人は多かったが、まつり町として今は、「だんじり・鬼は伊賀市のものと考えよ」と伝えている	藤堂高虎によるニュータウンのようなまちの作り方がなされたのが伊賀上野であり、そこでは郡部でとれた米を全部上野の商人が集めて、木津川を使って運び、大坂などで売りさばき、経済を回すことでまちが形成されてきたという背景がある。また、上野天神祭という行事を通じて、町衆とお城（今で言う行政）がうまく連携し、人々の熱量を高め、まちのにぎわいを作ってきた。
	無形文化の維持・継承 （行事：3日間）	祭りを実際にやっている地域の人とそれ以外の地域の人との熱量に温度差がある。	郡部の子供たちがだんじり行事を知ることだけではなく、それを見ることで、自分たちの地域で行われている祭りや行事に関心を持つことが大切である。上野天神祭のダンジリ行事は、ユネスコ無形文化遺産であり、市を代表する祭り行事であるので、まずはそれを見ながら、自分たちの地域はどうかという問いかけを学校の授業で先生がすれば、自分たちの地域の祭りを調べるきっかけにもなりえる。
			鍛冶町は人がおらず、子どもは外部から来た子ばかりだが、非常に雰囲気が良い。色々なところから人が集まって、皆でだんじりを盛り上げようとしている。鍛冶町は本当に手弁当でやっていたので、旧町の中でも独特の雰囲気の町である。元々戸数が少ない所だったので、それだけ外部から人が集まり、頑張っていこうという意識が醸成された。そういう意味で、そういう人はだんじりのファンだと思う。そういう人が増えていけば、継承できると思う。
			人を集める方策が、それぞれの町で違う。歴史的に言えば、昔はだんじりには、その町の長男しか乗れなかった。そのうち、次男・三男も乗れるようになり、そして女の子も認められたように、だんだん広がってきているわけだから、当然、町の人だけでは運営できなくなっているということである。恐らく、そういう形で運営されている事実が知られていないと思うので、それも含めて広報しながら、各町が独自の方法で募集をしていけば良いと思う。
			だんじりの曳手を公募していた時に、貴重な幕をむやみやたら触ったり乱暴に扱ったりしたことがあったようである。まちの人々との信頼、信用のもとで多くの人に広めていくことが重要
			引手の70%は手伝いであり、県内大学の留学生、地元信用金庫、企業などは団体として毎年お馴染みになっている。（参加した人は転勤してもまた来てくれている）。今後も色々なルートから繋がりを広げていきたいと思っている。

テーマに関する意見 (第3回での発言要旨)	意見の整理 (共通認識)		あるべき姿に関する論点	あるべき姿・目指す方向性
祭り町の人が恩恵を受けて欲しいという思いは当然だが、祭りを維持していく中で、各祭り町が人員の確保などで負っている負担感は否めない 上野天神祭は京都の祇園祭に起源があり、山鉾屋台行事は多くの人に見ていただくのもで、祭り町の人だけでなく、伊賀市に住んでる人や観光客も含め多くの人にとって大変魅力的なものである	▶	文化観光は、地域の人・歴史・熱量の維持があった上で成立するものである 【修正後】元来、ダンジリ行事は、祭り町の人々が、自らの文化を受け継ぎ、楽しむ姿を核として成り立っており、祭り町の人々が第一に恩恵を受けるものである。その上で、ダンジリ行事の魅力を広く発信し、その姿を多くの人々に見てもらうことで、地域全体として祭りを支えていくものである。 ↑ 【修正前】元来、だんじり行事は、まつり町の人々をはじめとした祭りに直接参画する人々が、第一に恩恵を受けるものである。	地域（まつり町）の人・歴史・熱量をどのように維持していくのか （恩恵と課題の両面において）だんじり行事はまつり町の人々だけのものなのか	だんじり行事全体のあるべき姿・目指す取組の方向性① 祭り町の人々が楽しみ、誇りをもって継承している行事（文化）を、来街者もまたその行事（文化）の価値に共感することで支えていく
無形民俗文化財の維持継続に関しては主と従の考え方があり、地域住民が主で、各ステークホルダーによる取組や支援は従にあたる 中学、高校、大学になると伊賀を離れてしまうことが多く、伊賀市に戻ってくる子供も少ない。小さい頃からお囃子を聞いていれば、祭りの時期になるとワクワクしてくる子はいるはずだから、そういったことに小さい頃から馴染めるようにすると良い	▶	（伊賀上野のまちの成り立ちからしても）だんじり行事は、伊賀上野と郡部の地域的な関係性の上で成立しているものであり、だんじり行事を市全体で継承することは、まつり町の住民だけでなく、その他（郡部）の住民にとっても自らの生活に対する恩恵があり、一定の意義が存在しうる。	市全体におけるダンジリ行事に対する認知、興味関心、参画機運をどのように醸成させるのか	
一つの町が祭りとしてきちんと成立させるために1町あたり100人以上が必要。各町は高齢者が多い中、外から様々な伝手や市職員にボランティアを頼ったり、苦勞をしている。だんじりの曳き手は一番人数が多く、40人ほど必要である。曳き手は力が要るけれども、経験はさほど要らない。 一方で、お囃子は1日の体験で出来るものではない。囃子は1曲ではなく4~5曲あり、角を曲がるときは特別な囃子を使うなどすべて決まっているので、祭りの前10日間から2週間はお囃子の練習をしなければいけない。小学校の子供はまず鉦から始めて、その次に太鼓、大人になって笛という形で、長い年月を経ながら覚え、継承していくもので、かなり時間がかかる。 実際に地域の住民の中で持続していくために、現実的にどのような打ち手があるのか考えておかなければいけない。例えば、現在は約70%が県内大学の留学生や地元の信用金庫からの協力者であるが、仮に、その協力者が減少してしまった場合、他に取り得る選択肢があるのかも含めて、今回検証しておくべきと考える。 市（行政）も交付金や補助金を入れて、市全体のものとして祭りを維持していこうとしているが、自分も参加したいと思う市民が祭りに参加できないのは、実は具合が悪いと思う。市の職員であればボランティアで参加できるが、意欲のある一般の市民も参加できるようなマッチングが必要ではないか。 岐阜県の高山祭では、山車を曳くより、お囃子のほうが技術が要るということで、地元の商工会との打合せなどは2週間前から全部止めるなど、町ぐるみで文化として残そうという機運があり、且つ、地元に戻った人が祭りに関わることで仕事を通じてメリットがあるという仕組みが作られている。町全体で支えていける雰囲気づくりが必要	▶	担い手（曳き手、お囃子）の確保は、それぞれのまちが工夫をし、形を変えながら取り組むべきものであるが、近年の一部のだんじりまちにおける取組などから、課題解決へのヒントは伺うことができる 高齢化や人員不足といった問題を乗り越えてダンジリ行事の運営を持続可能にするため、祭り町と祭りに参加意欲のある一般市民とのマッチング機会の創出などを通じて、ダンジリ行事を持続可能に運営する		だんじり行事全体のあるべき姿・目指す取組の方向性② 【修正後】ダンジリ行事のファンやサポーター（※）を増やすとともに、<u>ダンジリ行事の運営を持続可能にするため、行事に参加意欲のある人が関わりやすい雰囲気づくりをまち全体で取り組む（※）祭り町の人たちとの一定の信頼関係の下、ダンジリ行事の魅力に共感し、継続的な関わりを持っている人たち</u> ↑ 【修正前】まつり町の人たちとの一定の信頼関係の下、ダンジリ行事の魅力に共感し、継続的な関わりを持っている人たち（＝ファンやサポーター）を増やす

検討（議論） のテーマ	小項目テーマ	テーマに関する意見 (第1回での発言要旨)	テーマに関する意見 (第2回での発言要旨)
テーマ② (無形民俗文化財 (行事)としての の)維持・継承	無形文化の維持・継承 (行事以外：362日間)	長浜市の曳山博物館の中はだんじりの修理場や子供歌舞伎の練習場になっている	一つ町のお囃子についても、100年前と同じように演奏しているから、録音はしていないし、楽譜もない。言葉だけで打楽器はコンチキチンとかテンツクテンと言ったり、笛はオーヒヤヒヤと言っているだけで、指の動きはみな見まねでやっている。そういったものの継承もやっていきたい。今はデジタルで色々できるので、録音もやっていきたい。
		コロナ禍や事故により昔（本来の）祭りの姿を取り戻せていない地域もある中で、半年に1回のだんじり会館への入れ替え作業は、祭り町の人々の祭りへのモチベーションの維持の観点で寄与している	お囃子のコンサートや劇などがあれば、行ってみたくなる。だんじりが並んでいる場所で、演劇やコンサートが行われれば、壮観な感じがして良い。青山地域の中には知らない人が多いので、伊賀全体の市民として共通認識を持ち、何か心が動くことになっていけば良い。自分自身がこの委員会に参加することで興味が湧いたように、興味を持ってもらうにはどうすればよいかという観点で考えていくべき。
		市の施設だと特定の一部のエリアの住民だけの施設という認識でなく、市域全体としてのメリットや役割がある施設になっていくべきという考え方が必要	9町のだんじり町が個々の町のコンサートもやれたら良い。それぞれの町のお囃子がどんな演奏かを、違う町の人には全然知らない。何よりも皆が集まって各町のお囃子を聴く場所を作ってもらいたい。
		郡部の人にとっては遠い存在・会館に訪れたのは1回あるかどうか。昔の記憶だが会館は暗くて怖いイメージ。	2026年がユネスコ無形文化遺産登録10周年に向けて、だんじりの文化的な面を、例えばお囃子、祭りと町の生活にもう少し重点を置いていきたいと思っている。特にお囃子、子どもという観点での会館の位置づけとして、そこで練習ができるんじゃないかとも思っている。コロナ中は町の集議所を借りて練習していたが、だんじり会館を借りられる方が良い。
			京都から祇園祭で白樂天山という山を持っている町の人10人くらいが来て、もちろん入場料は払って入館してもらっているが、彼らの視察目的はだんじり会館の展覧物の見学に来たのではなく、お囃子の練習を見たかった様子だった。現在は白樂天山のお囃子は途絶えてしまっている、上野天神祭や滋賀県の大津祭が京都祇園祭の流れを汲んでいることを聞いて、来訪したようであった。
			今年は祭り3日間のうち金・土曜日は雨だったが、だんじり会館から搬出するところを毎年見に来ている人がいた。近くの桃青の丘幼稚園の園児は、会館ができてからずっと、雨が降っても見に来て、応援してくれている。会館の位置づけがコロナをきっかけに変わった気がしている。コロナで祭りが3年間中止になったが、だんじり会館からの搬出搬入だけは、ずっと続けてやってきた。斜に構えている人や鬼町の人も、入替作業に沢山の人が集まってくれた。

テーマに関する意見 (第3回での発言要旨)	意見の整理 (共通認識)	あるべき姿に関する論点	あるべき姿・目指す方向性
生涯学習課では体験教室を通じファンやサポーターを増やす取組が実施され、参加者は本当に地域に興味があり参加しているので、19名の参加者をいかに大切に祭りの担い手として育成し、つなげていけるかにかかっているという意味で、とても大切な役割と担っている			
生涯学習課のお囃子体験がどれくらい周知され、皆さんが認知していたかも気になる。自分の子供が小さい頃にこの体験教室があったかどうか分からないが、あったとすれば、体験教室自体を知らなかったと思う			だんじり行事全体のあるべき姿・目指す取組の方向性③
今、市内の小学校の子供たちがだんじり会館に社会見学などで訪れるケースはあるのか。	▶		
	お囃子を通じた祭事期間以外（362日）のコミュニケーション（まつり町と郡部、市内と市外）は無形文化の継承において有用である	▶▶	【修正後】市内小中学校の郷土教育をはじめ、日頃から、だんじり文化に触れるなど、市民全体が、有形・無形の文化（財）の魅力をより深く理解できるような機会の創出や、取組を推進する ↑ 【修正前】日ごろから、市民全体や関係人口が、有形・無形の文化（財）に触れることで、その魅力をより深く理解できるような取組を推進する

検討（議論） のテーマ	小項目テーマ	テーマに関する意見 (第1回での発言要旨)	テーマに関する意見 (第2回での発言要旨)
テーマ③ (有形文化財としての) 保全・保護	実物展示に対する考え方	だんじり会館設立当時から、まつり町では会館でのだんじりや幕の保管状態に対して、温湿度や陳列方法にネガティブな意見が多かった	
		だんじり会館の開館当時は、お祭り法案（略称）ができて全国各地で祭りを常設的に見せる施設が建てられたが、文化財保護の観点から、常設展示は温度・湿度の面でだんじりや幕にとっては良くないへのダメージが大きい。重要文化財の基準であれば100日を超さないという規定がある中で、観光に振れることで重要なものが劣化し失われることを心配していた。一方で、祭りは地域にとっても大事なものであり、それを広く知ってもらおうということも大事である。両方の側面でどのようにバランスを取るかということも、当当地域内では議論がなされてきたし、悩みもあった。当時は（今よりも）地域も常設展示に否定的であった	
			
	「幕」について		文化庁からだんじりの幕を収納する時は、折り曲げたり巻いたりせず横にして引き出しに仕舞うように言われている点からすると、だんじり会館で半年も下げておくことは不適切ということであるが、人が見て綺麗な美術品を1年のうち360日も引き出しに仕舞っておいても、何も意味が無いと思う。傷んできたら費用をかけて復元新調すれば良いと考えている。 本家の京都祇園祭では、町の人がそれを斬新で良いと思ったという理由で、平山郁夫のシルクロードの絵の幕を掛けているところがある。それは、祇園祭の幕の始まりが外国の絨毯を掛けてカッコいいと思ったのと同じであり、正常発達で良いことだと思う。必ずしも凍結的な保存をさせなくて、色々な保存の仕方や活用の仕方があると考えられる。 西町の引退幕は、もともと中国の北部で織られた蝦夷錦という織物が北海道アイヌ地方を経由して近畿地方に伝来したものである。新町の印の幕も、見た目はモノトーンで地味だが、朝鮮毛綴という韓国の織物で、韓国でも殆ど無いものである。そういう物語があることを知ると興味が湧き、その幕の歴史的背景などが分かるので、展示することで上手く分かってもらう仕組みが大事である。 幕はやはり古いものは残していく方が良いと思う。見たい人は、やはり昔から使われている素晴らしいものを見たいと思うのだろう。保存しながら見られるような場所が良いと思う。広いスペースは取れないので、月単位でどこかの町の幕が見られるようにして、その情報がSNSに上がり、だんじりの歴史も一緒に見られることを発信できれば、来訪の動機付けにつながると思う。 引退幕の写真を県立博物館で撮影している。幕は3メートルほどの大きさと高いところから撮影しなければ歪むので、博物館にある専用施設で撮影をしている。町の人の意向に沿っているかは分からないが、写真撮影所と見せる収蔵庫を兼ねたものがあれば良いと思う。 最近の博物館には、「見せる・見える収納」「見せる収蔵庫」という機能のある施設があり、例えば、子どもが見学に来た時だけ見学できるように、<u>保存環境と観覧機能を両立させている。</u>
	だんじり本体について	長浜市は修理に熱心に取り組んでいるという印象。会館は修理センターという重要な意義を持っている	だんじり本体の修理をする場所が無いのが課題である。幕は別の場所に運んで修理ができるが、だんじり本体の修理場所が無いので、そういう場所があれば良いと思う。
	保全コスト		資金的な支援をどのようにするかも課題である。だんじり町の課題は幕の修理復元や維持管理に費用がかかること。なかなか他人の祭りに参加するのはハードルが高く感じられるが、町の大事な美術品を皆で継承していこうという機運を高めていき、皆で町の財産や美術品を守るという切り口でやっていけば、少しはハードルが下がるのかと思う。

[illegible]

検討（議論） のテーマ	小項目テーマ	テーマに関する意見 (第1回での発言要旨)	テーマに関する意見 (第2回での発言要旨)
テーマ⑤ 文化振興によるまちづくりの全体像	一体的な検討	「エコミュージアム※」という考え方から、市民が中心になって地域の文化を自らが多くの人に広めていくという活動がある。「次世代の子供たちに地域を知り愛着をもってもらう」という取組がこれまで欠けていたので、子供たちに美術博物館を訪れてもらいそれに取り組んでいくということも大切	今の状態としては、だんじり会館は観光戦略課が中心になって考えており、美術博物館はそれとは関係なく、だんじり会館のすぐ近くにある旧桃青中学校で議論をしているということだが、全く別物で話が進んでいる。当然、別の施設なのでそれが基本であるが、今後、行政のあり方として双方を複合的に検討していく方が良い
		※ある一定の文化圏を構成する地域の人々の生活と、その自然、文化および社会環境の発展過程を史的に研究し、それらの遺産を現地において保存、育成、展示することによって、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする 野外博物館 （文部科学省）	
		商工会議所などが取り組んでいるまちづくりの観点でも、美術博物館が担う役割などもあると思うし、それを調整できる学芸員等の人材が必要と感じる。それらを考えていくためにもちょうど良い時期が来いていると思うので、色々課題は多いが、この委員会の議論を深めていきたい。	
	だんじり行事に関する展示		
		常滑市の陶磁器会館は、「陶磁器のまち＝常滑」のランドマークとして、人の回遊につなげていっている。さらに付近にある「陶の森資料館」を中心にまち歩きを楽しんでもらう仕組みを作っていくことで町の中での連携が進んでいき、結果的に人が回遊することで、地域の人によって認知されるというかたちが形成されている点は、学ぶところが多い。	美術博物館ができるなら当然学芸員を置くはずなので、その学芸員にだんじりの展示品についても <u>しっかり説明していただき、だんじりと町の暮らしとのつながりも分かり易く説明をしてもらうなどを期待したい</u>
			伊賀はタビマエで忍者、芭蕉、伊賀上野城というキャッチーなコンテンツに注目が集められるが、訪問先としてだんじり会館を選ぶ人は少ないと思う。タビナカでどうやって地域の文化に深く根差したところに来てもらうか、その方策を検討しなければいけない。 <u>今の観光案内所だけでは力不足である。</u>
			展示の仕方という観点では、展示物は素晴らしいものだが、 <u>上野の町の人にとってどのような意味があったか、どうやって継承されてきたか、町の人々の日常生活とどのように繋がっていたかがもう少し分かり易ければ、リピーターが増えていくのだろうという印象を受けた。</u>

テーマに関する意見 (第3回での発言要旨)	意見の整理（共通認識）	あるべき姿に関する論点	あるべき姿・目指す方向性
城端曳山会館は、「市民が自分の地域の暮らしへの誇りや愛着の醸成を図ることが課題である。」という認識を持っているように、先ほども出てきた「子供たちへのふるさと学習の機会提供や、ふるさとの歴史に触れる機会を増やし、曳山の魅力を伝えていく。」とある 地域への愛着は非常に重要な観点であると感じている。子供の頃からあるからこそ文化の拠り所になるし、そういったものは絶対に活かしていくべきで、その愛着は唯一無二である	▶		
<u>だんじり会館単体で考えるのではなく、地域全体の中で機能（ソフト）をどのように維持し、強化していくかも検討しなければならない</u>	▶		
<u>伊賀市として市全体の文化振興の観点から、これからどのような戦略を持って取り組んでいくか。その中でだんじり会館が担うべき機能をしっかりと位置付けていくことが大切である</u>			市全体の文化振興の観点（次世代への継承、魅力ある展示（学芸員の確保）、運営コスト、発信力など）からすると、今後の文化関連施設の整備検討は、可能な限り一体的かつ有機的に行う
今のだんじり会館に集まっている機能について、ハードでなければならないこと、或いは分散して他の場所でもできることを整理していくほうが良い		▶▶▶	だんじり会館のあるべき姿 方向性①
▶	展示や取組は、だんじりそのものではなく、町の人の日常生活との繋がりをテーマにすべきである		

検討（議論） のテーマ	小項目テーマ	テーマに関する意見 (第1回での発言要旨)	テーマに関する意見 (第2回での発言要旨)
テーマ④ 施設の運営（維持管理）／地理的な 視点からのあるべき姿	地理的視点からの施設と 運営	89年の月日を経て、一つの施設が同じ体制、同じ仕組みで続けるのは難しいことかと思う。周りの環境、社会情勢、価値観が変化している中で、変わっていくことは当然	
		（だんじり会館は）観光活用としての側面は難しい印象	
		今のだんじり会館は、観光売店としての機能も有しており、観光協会の事務所としても活用している。観光協会が指定管理者として健全な維持管理をするための方策として忍者衣装の貸し出しを行っている。	だんじり会館に行列ができていると思ったら忍者衣装の着替えの行列だった。入館料を払ってだんじり会館を見る人は、もう殆どいないのではないかな。
		35年前は会館の目の前に市役所、中心市街地には大きなスーパーもあり町が賑わっていたが、市役所が移転し、旧庁舎が図書館に生まれ変わろうとしている。さらに同時並行で美術博物館構想も旧桃青中学校跡地へ建てる動きをしていることもを勘案すると、だんじり会館の持つ意味もこれらに連動していくことで、町にとって魅力的な施設に好循環になると思う。	収益が上がる場所になって欲しい。 自分が他所の地域に旅行に行ったとき、どんな施設に行くかを考えたとき、やはり食は重要だと思う。会館に入場しなければ、そのスペースに入れない仕組みがあると良いと思う。
		だんじり会館の映像は、伊賀を訪れた人に伊賀上野の町を知っていただくためのガイドンスとしては良くできたツール	理想的なのは、はじめに全体をガイドンスする施設があり、そこで興味を持った人が「だんじり会館に行ってみよう。」「忍者屋敷に行ってみよう。」となること。現在は中心市街地の観光地の全体をガイドンスする施設が無いことで、個別のコアな魅力を持っている施設への来訪者が伸びない状況になっている。

テーマに関する意見 (第3回での発言要旨)		意見の整理 (共通認識)		あるべき姿に関する論点	あるべき姿・目指す方向性
		▶▶▶▶		施設の収益性と文化振興の両立はどのように図っていくべきか 周辺環境の変化や将来像を見据える中で、地域と市外の来訪者の双方にとって良い機能を備えた施設とは？	
周辺の人口や設備、建物自体の老朽化という変化が生じてくる状況を踏まえ、周辺環境などによる変化を前提とすることを一定考慮する必要がある					
機能として何が必要かという議論とは切り分けて考えていくと良い。それぞれが最適な場所に、適切に配置されている状態が理想である	▶	周辺環境の変化や将来像を見据えつつ、地域・市外来訪者の両方にとってどのような機能を備えた施設が良いのかを長期的な視点で総合的に考えていくことが大切		現在のだんじり会館の場所・建物におけるあるべき姿とは、「特定の具体的な機能」なのか「周辺環境などによる変化を前提とするのか」 ※あの場所にふさわしい普遍的な特定の機能が存在するのか、周辺の施設や社会状況により望ましい機能が浮かび上がるのか	だんじり会館のあるべき姿 方向性②
あの場所は、上野公園に訪れたあと次に行ってもらいたい所であり、来街者にまちへの回遊を促すためのポイントとして有効な場所である。正面にも町並みが見え目指すところが分かり易く、あの場所は非常に大事な所である。周辺には現在は組紐会館があり、商業施設も出来てきている。だんじり会館については、今あるものを有効利用するのは当然のことと思うが、ただし、今の機能だけでなく、色々なプラスの機能を足していくことで効果が出てくると考える	▶	一定の収益性も期待しつつ、来訪者に対し伊賀上野の趣深く多様な歴史・伝統・文化へと誘うゲートウェイ的な機能			現施設の場所利用については、一定の収益性も期待しつつ、周辺環境の変化を鑑み、地域・市外来訪者の両方にとって有益で、且つ、他の施設の機能を補完するための時代のニーズに沿った活用を検討していく
街中でだんじり文化を感じ取るのに一番手っ取り早い方法は、だんじり蔵を有効活用することであるが、来街者に対して蔵までのアクセス方法が示されていないことは、解決しなければいけない課題である 今、だんじり蔵の前に、実はQRコードが貼られていて、各町のYouTubeが見られるようになっているが、それが知られていない 駅前の商店街にいと、観光客から、駅前に普段からダンジリ関係の何かがあれば年1回祭りがあることがもっと分かり易いといった声や、町の人からも線路の向こうより駅前にあったほうが皆にダンジリに触れてもらう機会が多くなるという声も届く	▶▶	だんじり文化に触れる場所は、祭り町の蔵や駅前にある方が良い。今の場所は参観に供するには効果が低いかもしれない	▶		